

すっかんほ。

☆ 研究室だより No.2

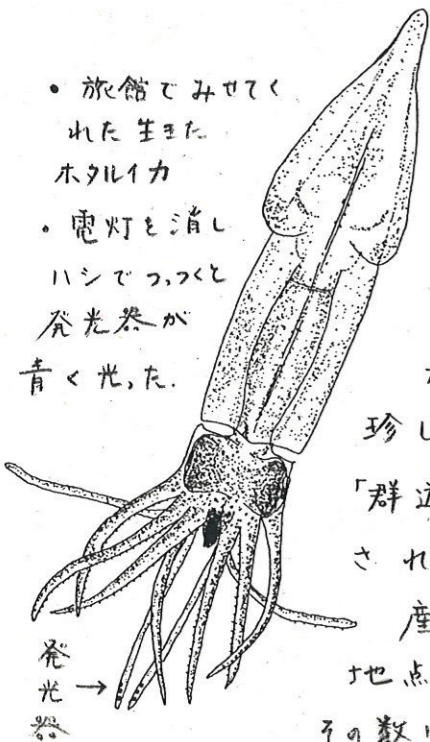
1992年 5月号

ホタルイカ

5月5日 午前2時30分 富山県滑川市にある
ホタルイカ観光船乗り場に、どこからともなく

人が集まる。その数約50名。まだ酔い
が残っているオッサンたちも。救命胴衣をわたされ体につけると、外気の冷たさと相まって緊張感がたどよい始める。

同2時55分 照明に浮かびあがった2世きの観光船に、
全員が乗り込むと同時にスクューの震動が体に伝わってくる。



・旅館でみせてくれた生きたホタルイカ
・電灯を消しハシでつづくと発光器が青く光る。

ホタルイカは、ふだんは、深海に生息しているが、2月から6月の日暮れになると、群れをなして岸まで産卵にやってくる。バケツでとくえるほどの大群で、地元では「身投げ」と呼んでいるそうだ。ホタルイカ自体は珍しくないが、岸まで群遊する海面は世界でも極めて珍しいので、昭和27年3月、滑川市周辺の「群遊海面」が国の特別天然記念物に指定されている。(ホタルイカが指定されたのではない)
産卵が終わる沖へもどるところと沖合1キロの地点に仕かけた定置網でつかまえるのだが、その数は産卵にくるホタルイカの数%にも満たないという。

同3時10分、定置網に到着。海面は波こそないが、かなりうねりがあり船もゆれている。網は一方からたぐり上げられ、2世きの漁船の距離はだんだん近づいてくる。観光船の全ての照明が消され海面は、ま、黒。

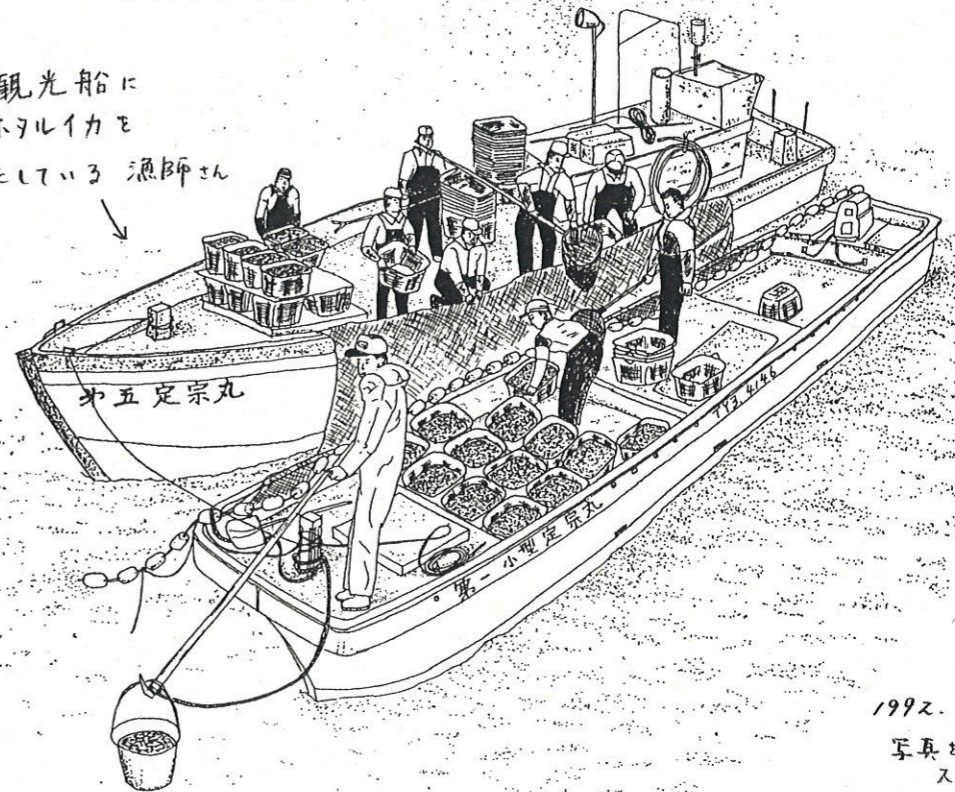
同3時20分、漁船同士の距離、約5m。

漁師さんの大きな夕モ網の動きに、視線が集まる。夕モ網を入れた瞬間、黒い海面に青い光の塊が現われ、輝く。網からこぼれ落ちたホタルイカも青く光っている。ホタルイカは、外から刺激を受けた時に強い光を発するのだ。その明るさは、昆虫のホタルの約10倍といわれている。漁師さんたちは、サービス精神満点で青い塊を空中高く何度も放り上げてくれる。そのたびに歓声が上がり、寒さも忘れる。

同3時50分 観光船に明りがとむる。青い光は、一瞬にして失われる。純度の高い透明な光は、ホタルイカの生命の輝きのように思えた。

(ウラハツク)

・観光船にホタルイカをわたしている漁師さん



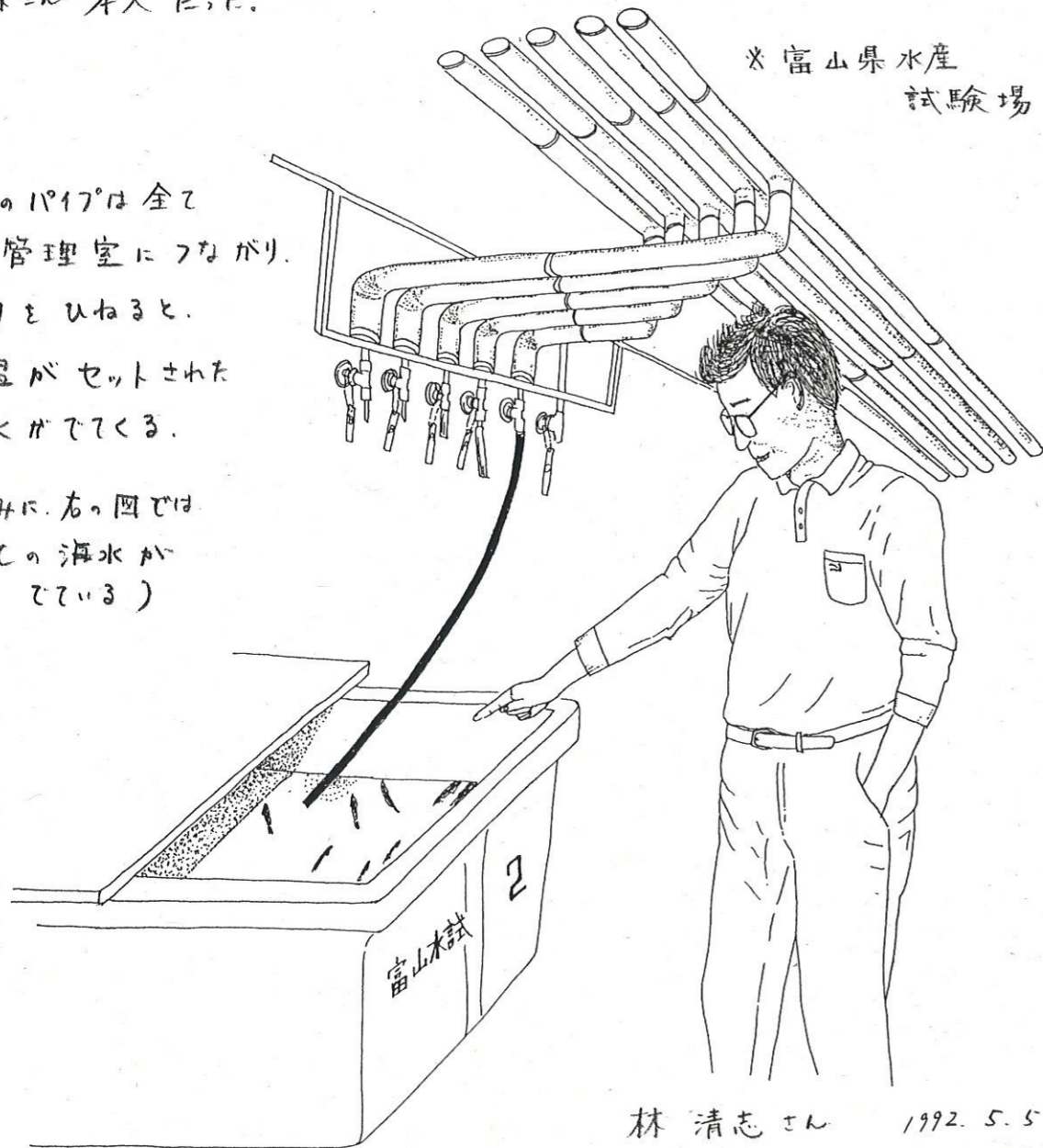
1992. 5. 5
写真とみて
スケッチ
Aoyagi

5月5日 午後1時、午前中、観光センターでみたビデオの中でホタルイカの研究者である林清志^{きよし}さんが登場していた。林さんは、漁港の近くの富山県水産試験場でホタルイカの生態や卵の発生について研究しているという話である。ほろほろ橋本がら来てそのまま帰ってしまうのは、心残りだったので、何の前ぶれもなく、ぼらと、水産試験場へ立ち寄りしてみた。まず会えないだろうと思いつつも、ドアをノックすると、出て来た人が林さん本人だった。

※富山県水産試験場

天井のパイプは全て
集中管理室につながり、
コックをひねると、
水温がセットされた
海水が出てくる。

(ちなみに、右の図では
4℃の海水が
出ている)



林清志さん 1992.5.5
(写真を拡大して)

林さんにとって今の時期(産卵期)は、まさにかき入れ時なので、研究中らしいが、話を聞くと、今朝(といってもまだ暗だったが)、私がみたホタルイカ漁の漁船に乗っていたというのだ。まさに、世間は狭いもので、その時と、たホタルイカが水槽の中で元気に泳いでいた。

ところで、今年は、ホタルイカが、めっちゃくちゃとれているらしい。例年の3倍位はかるくこえているということで市場では1kgあたり500円で取り引きされていた。2月末の初物の時には、一匹1000円の値がつくこともあるそうだ。

林さんをはじめとする多くの研究者たちにより、ホタルイカの生態は、少しずつ明らかになってきた。まず寿命が1年であること。ふだんは、オス、メス、ほぼ同数だが、産卵期は交尾したメスしか岸にやってくる。また、産卵された卵は、約1週間でふ化し、50mより浅い所で生活し、やがて深海へと移動していくことなど。すべて地道な調査の結果である。林さんは、いねいに説明してくれたばかりでなく、同じ、生物学を研究している仲間として、大学での研究がうまくいくようにと、はげましの声をかけてくださった。

ホタルイカが振り回す鮮やかな光は、一説によると外敵をいかにするためと言われているが、私には、生物の持つ、不思議な現象へといざなわれているようにも思えた。